

# 福知山式 子ども食堂の続け方



## 3者の立場からの思い

### やりたい人

子どもたちのために  
なにができるか

「きつずすとーにーる（意：子どもを支える）」という団体名で活動しており、子どもと接することが好きなメンバーばかりで、活動に対しても思いが熱いです。食事の提供はもちろん、子どもたちと一緒に遊んだり勉強したり、「子どもたちのあたたかい居場所づくり」のために何ができるか考えています。

岩根さん

### つなぐ人

やりたいという火が消えない  
よう伝えることは伝えて

この活動をずっと継続していくにはどういふスタイルがいいのか、学生には仕組みづくりをじっくり考えてもらいました。無理をすると活動自体が楽しくなくなってしまうので、できることは学生でやってほしいという思いがあるので、前に出すぎず、でも伝えるところは伝えて、というのを心がけています。

武田さん

### 協力する人

あくまでも主体は学生  
しっかり考えて取組を

私どもの母体が社会福祉法人で、ずっと地域貢献したいという思いがあり、話を聞いた当初から協力を前向きでした。ただ学生に口酸っぱく言っていたのは、中途半端な気持ちでやるのはよくないということ。楽しみにしている子どもたちのために、しっかり考えてやっていこうと話しています。

古口さん



地域の高齢化、担い手不足と言われる中、学生、施設と社協のコラボによる元氣な子ども食堂があると聞いた。それぞれの力を持ち寄る強みとは何か？話を聞きに福知山へと向かった。

学生

福知山公立大学2年生  
福島 幹人さん

学生

福知山公立大学3年生  
岩根 拓海さん

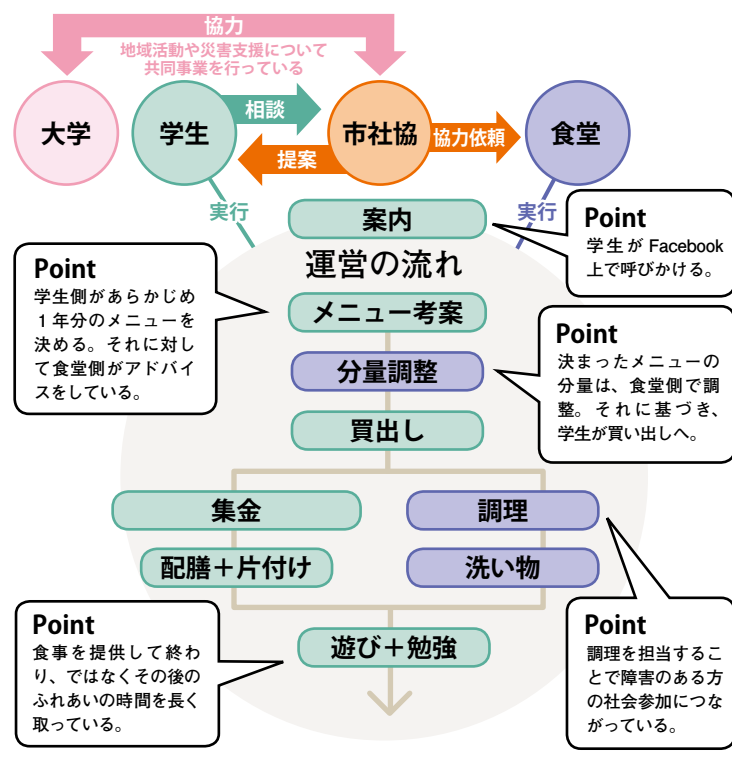
市社協

福知山市社会福祉協議会  
武田 彩さん

食堂

にじいろ食堂  
(福)しあわせネットワーク  
古口 貴之さん

## ふくちやま子ども食堂運営の構造



障害者の就労支援に取り組む(福)しあわせネットワークが、プロジェクトに賛同した。店長の古口貴之さんは当時を述懐する。「学生から話があった時、面白いなと思ったんです。だから是非協力しようとも学生には、やるのであれば最後まで責任を持ってやろうと強く言いましたね」紆余曲折を経て始まった「ふくちやま子ども食堂」。「子どもたちの楽しかったとか、次もまた来るよ、という言葉が一番の励みになる」と岩根さんは言う。それぞれの思いや強みを生かした無理しない活動が、つながって地域の力になる。思いをつなげる社協の仕事は、他にも応用できるのではないだろうか。

子どもたちのあたたかい居場所をつくるために

時計の針が午後5時半を回ると、子どもたちが1人、2人と集まってきた。それを笑顔で迎える大学生たち。子どもたちも顔馴染みの学生を見つけるとうれしそうに駆け寄り、おしゃべりをしたり、じゃれ合ったりして、元氣な声と明るい笑顔が広がっている。

2018年から福知山公立大学の食堂で、月1回のペースで開催されている「ふくちやま子ども食堂」。「子どもたちのあたたかい居場所づくり」を目標に掲げたこのプロジェクトでは、食事の提供だけでなく、学習支援や遊びの時間を学生と子どもたちがともに過ごしている。

「30人ほどの学生が参加しています。みんな子どもと接するのが好きで、何かしら地域貢献がしたいという思いを持っています」と話すのは、代表の岩根拓海さん。このプロジェクトが動き出すまではうまくいかないこともあったが、周りに相談しながらここまで来れたと語る。福知山市社会福祉協議会の武田彩さんが話を続ける。

「もともとは学生の有志が市内の飲食店に直接交渉して開催していたのですが、どのように継続していったらいいか悩んでいるようでした。そんな時、『どうしたらいいかわからないでアドバイスをください』と岩根君から相談があったんです。そこで市役所とも協力し、社協、学生で何度も話し合いの場を持ったんです」話し合いを重ねる中で、学食を運営し、

